

「クーラントタンク」

久しぶりにNBOでのインターンシップの様子について書こうと思います。その仕事ぶりの描写を通して、アメリカ人の方と働く上で大切だと考えたこと・気づいたことを坦々と挙げていきます。

バックグラウンド

私たちインターン生は、全体的なインターンシップの勤務時間を通して、刃物寿命の改善という事業に取り組んでいたのですが、工作機械をコントロールし、新しい刃物の試験を行うという権限が僕らインターンシップ生にはありませんでした。そのため、設定寿命要改善の刃物を各ラインのエンジニアに指摘・提案したとしても、一笑に付されるということが多々ありました。

そんな中、一人のエンジニアが私たちインターン生に、新しい製造ラインのクーラントタンクを設計してほしい、という依頼を持ちかけてきました。久しぶりに大きなプロジェクトを抱えそうだったため、私の心は弾むに弾んでいました。

依頼詳細

そのエンジニアの方によると、新しい製造ラインの二つの工作機械から流れ出るクーラント（工作液）を一つの共用のクーラントタンクに流し込み、二つの機械を一つのクーラントタンクでつなぎ合わせ、さらに、加工により生じた切粉をチップコンベアという機械で取り除くシステムを作るのだそうです。

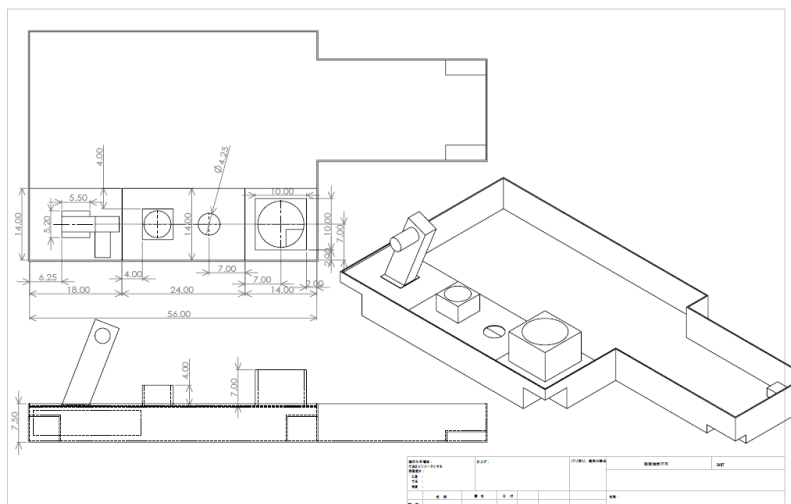
現状調査

この新しいプロジェクトに心躍らせた私でしたが、恥ずかしながら、各ラインで機能しているクーラントタンクや、チップコンベアがどのような構造で、どのような機能を果たしているのか、私にはまったくわかりませんでした。そのため、

まず、他の製造ラインの構造を観察することから始まりました。その過程で、各ラインのラインリーダーに質問を重ねたり、メンテナンスチームに機械部品の解体を依頼したりしました。

図面設計

また、その作業と同時並行して、新しい製造ラインの二つのマシンに適したタンクを作成するため、このラインに配置された各マシンの寸法、配置位置などを一からメジャーで計測していきました。そして、それらの各値から導き出された己の構想の理想図を、CAD ソフトを利用して具現化していきました。



クーラントタンク青写真

コミュニケーションの齟齬

しかしながら、その青写真を担当のエンジニアに見せるや、私がまったく英語での意思疎通ができていなかったことを思い知らされたのでした。実は、彼によると、一からまったく新しいクーラントタンクを作成するのではなく、中古の油まみれになったタンクを洗浄し、それを適当なサイズに切り落とし調整する予定

だということです。私は、この瞬間、自分の英語によるコミュニケーション能力不足を疑い始めました。やはり、英語に不慣れな日本人にとって、仕事場での英語でのコミュニケーションにおいて最も重要なことは、確証がない場合は、長年積み重ねてきたプライドをすべて投げ捨てて、聞き返したり、再確認したりする勇気を持つことだと思います。作業がある程度進んでから、解釈の誤差が明るみになると、後で取り返しがつかなくなってしまい、それまでの作業がただの徒労と化してしまう可能性があります。

清掃一択

ともあれ、私の目の前に、どす黒い中古クーラントタンクがいきなり登場したため、私はこの怪物に向き合わざるを得ませんでした。私は、エンジン動力つきの洗浄器を片手に、黒色の輝きを放つタンクをキレイに掃除していきました。途中、洗浄器のエンジンが、何等かの理由で停止するなどの異常緊急事態が発生し、モップによる手洗いが余儀なくされました。しかし、私はそんな悪質なハプニングにもめげず、モップを上下に振りかぶるという得意の単純作業の繰り返しで、どうにか、クーラントタンクの色を黒からシルバーに変えることができました。この作業後、私の顔面と爪の中の色相は幾分か黒色にシフトしていたことを念のためにここで告白しておきます。ただ、この単純作業を揚々となしている様子を見ていたメンテナンスチームや各ラインの同僚たちが、私に賞賛の目を向けていました（おそらく）。この奮闘により一抹の信頼を彼らから得ることができたと実感しています（おそらく）。このことから、海外駐在というチャンスを得た駐在員の方は、このように現場の作業と一緒に現地従業員の方と同じ仕事をこなしてみるということが、周囲からの信頼を得て仕事がしやすくなるということが起こりうるのではないのでしょうか。たまには、泥まみれになって一緒に笑い合うことも、異文化間のコミュニケーションにおいて大切な要素だと思います。

運搬依頼

これまでの短い人生の中で経験することがなかったような苦行を通り過ぎ、私は自分が一歩前進したのではないか、という錯覚にとらわれていました。ただ、

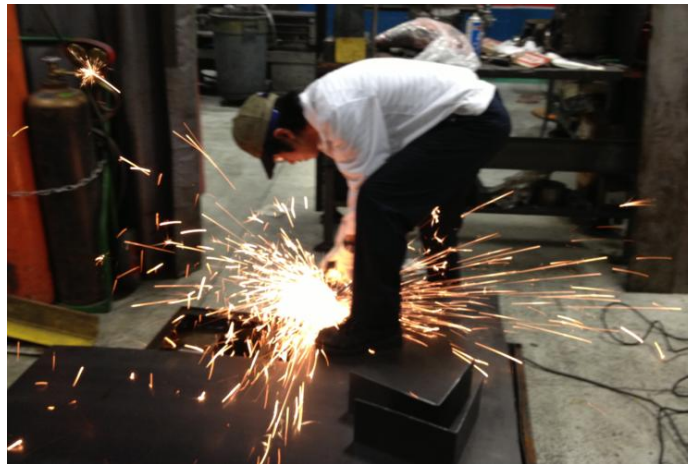
このような薄っぺらい達成感に浸っていると、目の前には新たな厳しい現実が横たわっていました。それは、この重量感のあるクーラントタンクのサイズを変更するため、どのように加工場に持ち込むのか、という単純明快な問題でした。私は、ふと自分のか細い二の腕の筋肉を確認した後、私一人が発揮できる力で、この無理難題を解決することは不可能であることを悟り始めました。

そのため、フォークリフトを自在に操る同僚に、たびたび、クーラントタンクの移動を依頼しなければなりませんでした。彼がフォークリフトをコントロールする傍ら、私は、ガソリンスタンドの店員のように彼をボディランゲージで先導し、クーラントタンク兼フォークリフトの安全を確保せねばなりませんでした。私は、この過程で一つ、現地の従業員の方と上手にコミュニケーションをとる方法を見出していました。それは、従業員の方の名前を直接読んであげる、ということです。「HEY!」とか、「EXCUSE ME!!」とかじゃなくて、作業服の左胸部位に刻まれているネームタグをきちんと見据え、笑顔で「JOHN!!!」と叫ぶべきだったのです。それは、英語の言語の特徴ならではのようです。なぜなら、誰もが「YOU」になりうるので、その人個人特有の名前を随所で読んであげることで、自分自身が誰に向けて喋っているのか、ということ、その会話相手の方に意識づけてあげることができるのです。

拙者に切れぬものはある

若干、光を放つようになったクーラントタンクを、今度は新しいラインに適したサイズに切り落とさなければなりませんでした。しかしながら、私は機械工学を専攻していたにも関わらず、鉄のようなものすごく固い物体を切り落としたことなど一度もありませんでした。当初は、どうしていいのか途方にくれていましたが、メンテナンスチームのリーダー格である方に、ディスクグラインダーという鉄を削り落とすための機器の使用方法について教えを乞いました。はじめは、猛々しい音を立てて回転するグラインダーに慄いたり、切削部位から飛び散る黄金色の火花に度肝を抜かれたりしていましたが、師匠の丹念なご指導により、無事にまっすぐ鉄を切り落とせるようになりました。この作業から、アメリカ人の方に何かを教わるときは、相手の神業を随所で褒めてたたえることが重要だと感

じました。私は、師匠の仕事ぶりを滞在時間の 9 割において持ち上げていました。すると、一旦褒めると、今度は出し惜しみなく自らの持っている技術をきちんと伝承してくれるのです。しかし、ふと気づいてしまったのですが、これは日本でも同じことからもしませんね。



鉄をまっすぐ切り落とす様子

溶接とのご対面

また、今度は適切なサイズに切り落としたクーラントタンクに漏れがないように側面を鉄板で溶接しなくてはなりませんでした。加えて、使い古したクーラントを工作機械に送り戻すためのポンプの底面からの高さを調整するための、マウントと呼ばれるパーツを作成しなければなりませんでした。しかし、私が溶接の実践的技術を実践したのは、3年前に行った大学の授業の1コマだけでした。その授業で得たことは、溶接に対する過剰な恐怖体験と苦手意識だけでした。そのため、クーラントタンク作成にあたり、まさか自分が溶接にかかわることになることを寸分も予測していませんでした。

そこで、先ほどのメンテナンスのリーダーの方に再び教を乞うてみました。しかしながら、そのお方によると、溶接というものは、少なくとも3か月以上かからないと身につかない代物である、と小指ではじく勢いで一蹴されました。し

かし、溶接個所が数十か所にも及んでいたのも、毎回この困難な作業を彼に外注するわけにはいきませんでした。

そのため、同じフロアの隣の席に、着席していたエンジニアの方に、一から教えてほしい、と頼まなくてはなりません。彼は、渋々僕の依頼を承諾し、きちんと初手から手ほどきしてくださいました。彼は、溶接の基本的な技術である、「小さな円を描きながらゆっくりと進行方向に進んでいく」ということを初心者中の初心者であった私にご教授してくださいました。



メガネを着用してください

そこで、私は彼の巧みな溶接技術を凝視して、必死に真似をしようと試みました。しかし、私が渾身の力を込めて完成した溶接のラインは、御世辞にもいい仕事と言えず、まるで、ところどころ太さが異なるミミズが蠕動運動しているようでした。ただ、こんな無様な私の技術作品に対しても、アメリカ人のエンジニア、そして、メンテナンスのチームの方々は、ただ単に「GOOD」と褒めてくれました。私の仕事を否定するものは、幸か不幸か、一人もいませんでした。

これは、一つのアメリカの文化で、公共の場所で部下を叱らない、という性質の現れだと思えます。正直、叱られるのが苦手な私にとって、この文化的特徴は都合のよいことですが、叱られないと一体どこでどうやって自分の問題点や欠点を探し出すことができるか、と懐疑的になりました。そのため、ここアメリカ社

会では、本当に実力がないものは知らず知らずのうちに押しつぶされていってしまいます。一方、上司が部下の仕事ぶりをよく観察し、改善点があればその都度、指摘が入る日本社会は、未熟な若者が成長できる機会をたくさん持っている、ということができると思います。

まとめ

結局、クーラントタンクについて大層な設計図を供給する必要もなく、エンジニアとしての職業経験を得られたとは、正直言い難い結果となってしまいました。

しかし、新しい製造ラインに適したタンクを模索する過程で、上に挙げたようないくつか小さいながらも得られたことが多々ありました。

NBOのような、アメリカに進出した日系製造業でインターンシップ生として働く機会を得ることができて本当に感謝しております。学生という安楽な立場でしか気づけなかったことがありました。この経験により感じたことを、もし将来海外駐在というチャンスがあるならば、己のみならず、周囲の駐在員に伝えることで海外の職場環境によい影響を与えたいと思うようになりました。



師匠（ビルさん）・チップコンベア・私・クーラントタンク（下方）